

平成30年度 学校評価 自己評価書

あま市立秋竹小学校

1 総 括

(1) 教育目標（学校経営案より）

学習指導要領の基本理念をふまえ、児童のすぐれた個性を伸ばし、個を生かす教育活動を通して、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図る。

<めざす児童像>

- | | |
|--------|-----------------------|
| ○ 強 く | 自他の生命を大切にし、たくましく生き抜く子 |
| ○ 正 しく | 自ら学び、正しく判断できる子 |
| ○ 明 るく | 礼儀正しく、心豊かで思いやりの心をもった子 |

(2) 本年度の重点努力目標

- ア 基礎・基本の確実な定着をめざし、「わかる授業」「楽しい授業」を心がける。さらに、体験的な学習、問題解決的な学習を重視し、自ら課題を持ち、学び合う力の育成に努める。また、展開を工夫し、自分で考える道徳の授業づくりに取り組む。
- イ 異年齢集団「なかま」活動により、思いやりの心や感謝の心を育てる。また、「読書の時間」の充実のために「読み聞かせ」を職員とボランティアで積極的に行う。
- ウ 外遊びを推奨し、体育的行事を計画的に実施するとともに、歯と口の健康に関する指導に取り組み、家庭の協力を得ながら正しい生活リズムづくりをはじめ基本的な生活習慣の育成に努める。
- エ 「あいさつ運動」をはじめ、諸行事を通して教師が児童に寄り添うなかで、児童理解を深め、心のつながりを大切にした学級・学校づくりに取り組む
- オ 定期的な安全点検以外にも、遊具の安全な使用方法や廊下歩行の安全指導など、安全な学校環境づくりに努める。対応マニュアルを常に見直し、避難訓練を行う。
- カ データの共有化・諸会議の効率的な運営を行うことで多忙化解消を図り、教職員が健康で充実して働けるよう努める。
- キ 学校評価や個人懇談の実施、ホームページの更新、学校通信の発行、外部講師の招聘・行事へのPTA協力等を通して、学校を地域に開き、家庭・地域との信頼関係づくりに努める。

2 自己評価の実施体制

- (1) 調査時期 平成30年12月
- (2) 調査項目 別紙アンケート参照
- (3) 調査対象 有効回答者数／対象者数
- | | | | |
|------|------------|------|---------------|
| ・児童 | 135名／全147名 | | |
| ・保護者 | 102名／全112名 | ・教職員 | 13名／13名 計272名 |

3 調査結果

別紙アンケート結果参照

4 考 察【児童・保護者・教職員の総括的考察】

- (1) 児童アンケートを昨年度の結果と比較すると、全体的に肯定的な回答が多くなっている。特に1「今年の学校目標の『あいさつをしよう』『なかよくしよう』『本物をめざそう』を知っている」2「困ったことがあったとき、相談できる人がいる」9「学校であったことを、家でよく話す」の3項目は、10%以上増えている。その他の項目においても2項目で微減が見られる以外、肯定的な回答が増えており、達成状況は11項目でA、2項目でBとなっている。このことから、児童はおおむね充実した学校生活を送っていると考えられる。
- (2) 保護者アンケートの2「学校の行事や授業参観には、できるだけ参加している」の肯定的評価が95%となっている。5「学年通信や各種たより、HP等で、学校の様子がおおむねわかる」（91%）と併せて、保護者の学校に対する関心が高いことがよくわかる。また、運動会のテント設営や校外学習時の付き添いなどに積極的に参加していただける方も多く、保護者が学校に対してとても協力的であることがわかる。

- (3) 保護者アンケートで、3「子どもの学習や生活について、担任や他の教職員に相談できる」は、今年は1%減っていたが、児童の関連項目の結果は、昨年度と比べて10%増えていた。「自分の方を見てほしい」という傾向の児童が増える中、児童間で起きたトラブルが、保護者からの相談で分かる傾向もあることから、学校で困ったことがあったとき、「すぐに先生に相談できる」関係の構築により力を注いでいく必要がある。

5 成果と課題

<成果>

- 保護者アンケートの11「わが子は大切にされ、認められている」は、前年度との比較において肯定的評価が、昨年度は5%、本年度は2%増えている。また、7「わが子は、友だちとなかよく生活している」(肯定的評価が97%)、6「わが子は、楽しそうに学校へ通っている」(同95%)も高評価を得ていることから、多くの児童が学校へ楽しく通っていることが伺えるとともに、保護者の学校に対する信頼感が少しずつ高まっていると考えられる。

<課題>

- (1) 児童アンケートで、昨年度までどの学年でも肯定的な評価が一番高かった、11「なかま活動に楽しく参加している」の肯定的評価が、3%減っていることに注意が必要である。「なかま活動」は、本校の教育活動の中核をなすものの1つで、遊びを通して縦の円滑な人間関係を築く中で、思いやりや感謝の気持ちを育てることをねらいとしている。クラス以外で濃密な人間関係を築ける場であり、自己肯定感を育む場ともなっている。職員が半数以上移動した後でもあるので、そのあり方について十分に検討し共通理解を図っていく必要がある。
- (2) 児童アンケート6「学校は楽しい」について、5%の児童が否定的な回答をしていることを重く受け止める必要がある。カウンセリングを受けている児童や保健室登校を要した児童等、全職員で共通理解を持って対応し、すべての児童が「学校は楽しい」と答えられるような学校をめざしていくことが大切である。
- (3) 保護者アンケート1「本年度の学校重点目標(スローガン)を知っていた」が昨年に続き低評価であった。特に「本物をめざそう」はわかりにくいという意見もあり、児童に話している内容を、保護者にも広く伝えていく必要がある。また、学校重点目標にある、「あいさつをしよう」の関連項目8「わが子は、自分からあいさつをよくする」の肯定的評価が、昨年度に比べて6%減っている点についても考えていかなければならない。

6 改善策

- (1) なかま活動の取り組みの見直し

なかま活動は、開校当時から続く本校伝統の活動で、思いやりや感謝の気持ち、自尊感情を育む場として、保護者や携わった教師も高く評価している取り組みである。指導に携わる教師の移動や経年する中でその本来の目的が失われ、形骸化してきているところも見受けられる。今一度、なかま活動のねらいを明確にし、職員構成や児童の実態に合わせた取り組み方を考え共通理解を図っていく。

- (2) 生徒指導体勢の確立

①生活アンケートの実施やQ U等の活用を図るとともに、個別相談を実施する。②報告・相談を確実に言い、必要に応じてチームで取り組む体勢を確立する。③児童・保護者の声に耳を傾け寄り添うための研修を行う。④児童の様子についての情報交換を金曜日の午後の打ち合わせの時間に行い、指導事項については文書でも回覧し、引き継ぎが確実にできるようにする。⑤スクールカウンセラーや教育相談センターなどと相談連携する。

- (3) 心の教育の充実

授業を中心に、様々な場面で「話す」「聞く」「話し合う」活動の場の設定を工夫し、「自分の思いを的確に伝え、相手の思いを共感的に受け止める」という伝え合う力の向上をめざす。また、学校生活全般、特に係活動や当番活動等において、教師から児童・児童相互のがんばりを認めることを大切にし、社会性を育み、自己有用感をもたせる。

- (4) 保護者との連携を図るための情報発信

課題の(3)であげた、学校重点目標が保護者に十分理解されていないという点について、情報発信の内容やあり方について再度検討する。本校のHPのアクセス数は、ここ2・3年飛躍的に増えている。これを活かし、「あいさつ」について家庭と地域・学校が連携して取り組む。